

露地栽培におけるモモ「さくひめ」の適正着果量

露地栽培におけるモモ「さくひめ」は、仕上げ摘果時に 16 果/㎡で着果させると、収量・品質を確保しながら連年安定生産が可能である

農業研究センター果樹研究所落葉果樹研究室（担当者：湯田健太）

研究のねらい

モモ「さくひめ」は、自発休眠覚醒に必要な低温積算時間が少なく、温暖化の影響を受けにくいうえ、既存の早生品種より大玉で高糖度な果実が生産可能である（農業研究成果情報 No. 840）。しかし、露地栽培での適正な着果量ははっきりわかっていない。そこで、連年安定生産が可能な適正着果量を検討する。

研究の成果

1. 果実横径は、16 果/㎡区と比較して 13 果/㎡区は肥大が大きくなり、19 果区は肥大が小さくなる（図 1）。
2. 果実品質は、16 果/㎡区と比較して 13 果/㎡区は 1 果重が重くなり糖度は高くなるが、推定収量が少なくなる。19 果/㎡区は推定収量が多いが、1 果重が有意に小さくなり（表 1）、樹勢がやや弱くなる。

成果の活用面・留意点

1. 本試験は、露地栽培「さくひめ」11～12 年生の立木仕立て（2 本主枝開心自然形整枝）で実施した結果である。
2. 核割れを助長するおそれがあるため、硬核期（満開約 55～70 日）の過度な摘果は避ける。
3. 満開約 25 日後に予備摘果、満開約 50 日後に仕上げ摘果を行い、着果数をそろえた。

【具体的データ】 No. 1091（令和6年（2024年）6月）分類コード 02-10 熊本県農林水産部

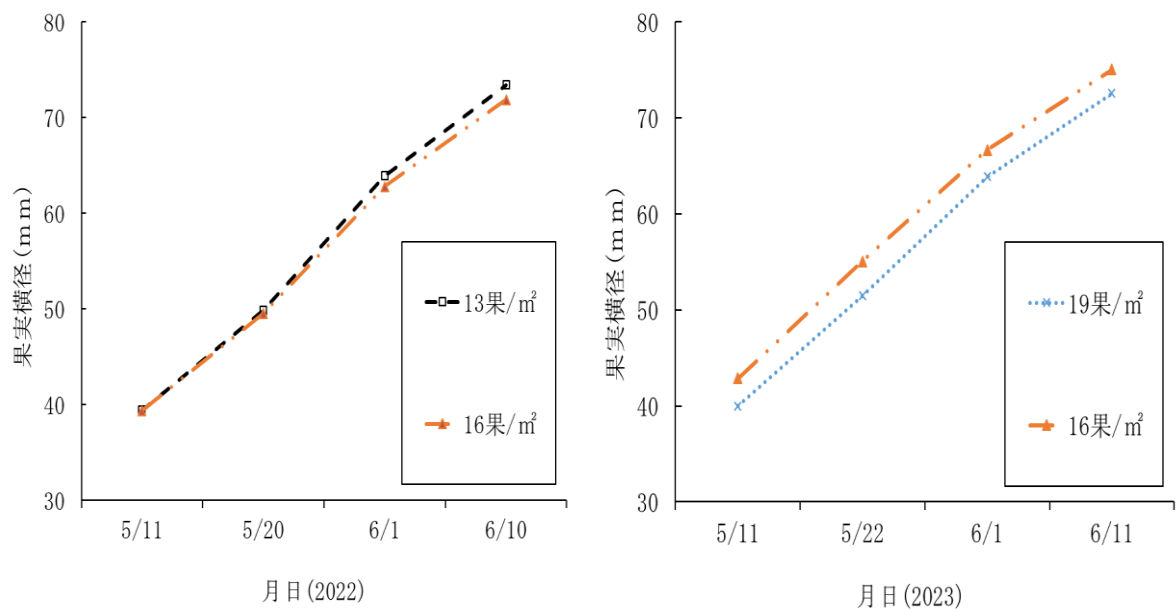


図1 モモ「さくひめ」の仕上げ摘果後の肥大の推移



図2 各試験区の着果状況

表1 モモ「さくひめ」の仕上げ摘果時の着果数の違いが果実品質に及ぼす影響

年度		1果重 (g)	果皮色 ^{注1)}	糖度 (Brix)	果肉硬度 (kg)	推定収量 (kg/10a ^{注3)})
2022	13果/m ² 区	287	4.5	15.5	2.0	2090
	16果/m ² 区	264	4.5	14.4	2.0	2367
	有意性 ^{注2)}	*	n. s.	*	n. s.	—
2023	16果/m ² 区	254	4.4	15.9	1.7	2275
	19果/m ² 区	231	4.5	15.5	1.7	2454
	有意性 ^{注2)}	*	n. s.	n. s.	n. s.	—

注1) 果皮色については、良5～不良1の5段階で評価

注2) t検定により**は1%、*は5%水準で有意差あり。

注3) 収穫時の1果重(kg)×1㎡あたり着果数×1000㎡×樹冠占有率70%×健全果率80%にて試算

注4) 収穫日 2022年：6/13、16、2023年：6/13、15